

所員の自著紹介

『プーシキン 1799-1999』

プーシキン生誕 200 周年記念祭実行委員編
日本ユーラシア協会, 1999 年 6 月 6 日 (48 頁)

ロシアの国民詩人プーシキン (1799~1837) の生誕 200 周年にあたり, 本国ロシアはもとより国際的に多彩な催しが企画された。小野理子, 浅岡宣彦, 奥村剋三, 法橋和彦, 田辺佐保子, 杉野ゆり, 米川哲夫, 箕浦達二, 井桁貞義, 中本信幸, 藤沼 貴, 沼野充義, 川端香男里, 寺西春雄, 小野光子, マルガリータ・富田, V・カザケーヴィチ, 藻利佳彦ら内外の研究者 18 名が寄稿した文集で, プーシキンの生涯, 詩, 小説, 劇作品に論及し, 世界文学, 日本文学, ロシア演劇, 音楽などのかかわりについても触れている。巻末には略年譜, 翻訳書・参考文献解題も付され, 写真・イラストも豊富な本書 (A4 版) は, 小冊子ながら, 楽しいプーシキン・ミニ百科である。

(中本信幸)

『トルストイと現代』

日本社会文学会編
日本社会文学会地球交流局, 1999 年 6 月 15 日 (42 頁)

本冊子は, 1998 年 8 月 17 日, ロシアの文豪トルストイの生地ヤースナヤ・ポリャーナの国立トルストイ博物館で開かれた最初の日露文学シンポジウム「トルストイと現代」でのパネリストの報告とトルストイ館長の挨拶とを収めている。ウラジーミル・トルストイ「トルストイ思想の新発信地ヤースナヤ・ポリャーナ」, 中村青史「トルストイと横井小楠・徳富蘆花」, 中本信幸「トルストイと泉 鏡花」, 西田 勝「トルストイと田岡嶺雲の文明批評」, 平岡敏夫「石川啄木とトルストイの日露戦争論」, 井上理恵「トルストイと小山内薫・島

村抱月・杉本良吉」, イリーナ・V・ニケリーナ「トルストイの日本像」, タチャーナ・N・アルハンゲリスカヤ「トルストイとブッダー仏教」, キム・レイホ「東洋諸国におけるトルストイ像」など多数で鋭い問題提起, 最新の研究成果が盛り込まれている。(中本信幸)

『ホセ・マルティ選集』第 3 巻

後藤政子 (監修・訳)
日本経済評論社, 1999 年 6 月 30 日 (418 頁)

世界的に知られる (と言っても日本だけ例外かもしれないが) ラテンアメリカの思想家ホセ・マルティの選集 (全 3 巻) の最終巻である。企画以来 3 年目にしてようやく第 3 巻を上梓することができた (第 1 巻の文学編は別の訳者の手で 98 年末に刊行した)。

「詩人, 小説家, 劇作家ジャーナリスト, 教育者…マルティ」と称されるように, いかにも 19 世紀の啓蒙思想家らしく, マルティの活動はきわめて多岐にわたる。だが, 日本ではもっぱらキューバ独立の父として知られ, 1959 年のキューバ革命成功とともに紹介されている。確かにそうした見方は決して間違いではなく, 今日のキューバではフィデル・カストロはもちろんのこと国民に深く敬愛されており, キューバ革命の思想的原点はマルティにある。また, ソ連消滅後の政治経済体制の転換 (いわゆる自由化) の基軸もそこにある。

しかし, 今回, 日本での選集刊行が決まり, あらためてその作品 (きわめて膨大なものであり, 各巻 600 ページ, 全 27 巻に及ぶ) を読み直してみても, 単に「キューバ独立の父」で済ませてしまうにはあまりにも惜しいものがあることに気づいた。少年期に植民地政府に投獄されてから 1895 年に戦場で斃れるまでの 42 年の生涯は文字どおり独立実現に捧げられたものだが, その背後には今日においてもなお普遍的価値をもつ独自の思想

があったのである。

マルティは人間の本性を自由であるにとらえ、自由の実現を人間の義務であると同時に名誉であるとした。だからこそ生涯を独立運動に捧げたのであったが、興味深いのは、たとえば、彼は黒人の解放を最優先課題のひとつとするなど下層大衆の復権を唱えたが、にもかかわらず、ある人種が他の人種の優位に立つことを拒否し、「人種問題というものは存在しない」としていたことである。それはなぜかということだが、そこにマルティの思想の独自性がある。その深さはここでは簡単に示すことはできない。

この第3巻を構成するにあたっては1880年にスペインから米国に亡命してきたわずか27歳の小柄なやせ細った青年が、一方では10年戦争といわれる1865年の第1次独立戦争の超大物指導者や上層階級、他方ではフロリダ半島の下層の移民労働者など内外の多様なキューバ人を統一して独立戦争実現にまで導き、戦場で斃れるまでの作品をとりあげ、その思想を明らかにするという手法をとった。日本ではあまり知られない新しいマルティ像を打ち出せたのではないかと思っている。

『プログレッシブ英語逆引き辞典』

国広哲弥・堀内克明共編

小学館、1999年7月（1313頁）

本辞典は普通の逆引き辞典と異なり、単語の語末部分を切り取り、それをアルファベット順に並べたものである。各項目内の単語の配列もアルファベット順にしてあるので、普通の逆引き辞典より検索ははるかに楽になっている。正確には「語末引き辞典」と呼ぶべきものである。形の上では同じ語末でも、発音がちがったり、語源がちがったりすると別項目扱いにしてある。単なる機械的に配列した辞典でない点も大きな特色である。語末によってはその単語のアクセントの位置がほぼ決まっているものが少なくないので、その点にも触れてある。語末要素が形を変えて語頭に付くこともあるので、その時の形の変化にも触れ

てある。おそらく世界的に見てもユニークな辞典であると言えよう。

『皇帝カルロスの悲劇—ハプスブルク帝国の継承—』

藤田一成著

平凡社（平凡社選書 No. 199）、1999年11月25日（310頁）

近代ヨーロッパ史上、君主国は君主の死をもって支配権の継承がなされるのが通例であり、生前の引退は極めて珍しい。この稀有な事例の一つに、16世紀前半のヨーロッパに君臨したカルロス5世がある。しかも、彼はいくつもの国の君主を兼ねていたために、その各々について、自らの手で順次退位の手続きを取ることになる。

本書は、まず引退を決意するまでの複雑な紆余曲折を解き起こすことから始まり、次いで引退のハイライトともいえる、ネーデルラントの君主としてブルゴーニュ公爵位からの華々しい退位式典の展開の過程を追いながら、その中で語られた演説の内容を分析することによって、異例の生前退位にいたる背景を明らかにする。

引退したこの皇帝は、その後、ブリュッセルを発って海路北スペインに渡り、カスティージャを縦断するという苦勞の多い旅を続けて、その余生を送ることになるスペインの山深い修道院に3カ月の月日をかけてようやく到着することができた。本書では、その間の旅の過程と、ここで死去するまでの19カ月に及ぶ隠遁生活の様子を、カルロス自身やその側近と、スペイン当局者との間で交わされた400通を超える書簡を解読し、分析することによって描写しているが、そのお陰で一般的にありがちな定型的で完璧な君主像ではなく等身大の人間性を垣間見ることができた。そして、最後にカルロスの引退とその死がもつ歴史の意味を考察している。

時あたかも、西暦2000年はカルロスの生誕500周年にあたり、ヨーロッパ各地でさまざまなイベントが予定されており、日本でも彼の存在が認知されるようにささやかでも貢献できればと思

う。

『中間言語分析：英語冠詞習得の軌跡』

水野光晴著

開拓社（平成 11 年度科学研究費補助出版），
2000 年 2 月 20 日（290 頁）

本書は、言語対照分析と誤答分析の欠点を補うために筆者が体系化した中間言語分析について述べたものである。言語対照分析は、学習者のエラーを排除すべきものとして、ネガティブに捉えていたのに対して、誤答分析はエラーを第 2 言語習得に必然的なものとして、ポジティブに評価した。しかし、研究の対象に関しては、両者は静的なエラーの断面を分析するに留まっており、L2 習得に介入する様々な項目のダイナミックなプロセスは追求されなかった。また、研究の視点も、両アプローチでは、研究者の一方的な視点で行な

われた。

他方、中間言語分析では、研究者と学習者の双方向の視点を重視する。すなわち、中間言語分析は、ある研究対象項目の動態を、中間言語発達の全過程にわたる実験データにもとづいて追跡し、その原因を明らかにして、外国語教育の改善を目指す病理学的アプローチである。しかも、この研究で得られる結果は具体的であり、一般的である。したがって、この研究は、(i) 教室でのエラーの訂正、(ii) 文法説明の提示、(iii) 言語材料とカリキュラム編成、という三つのカテゴリーに関して要領を得たものである。

筆者はそのモデルケースとして、本実験と 5 回の追試を合わせて約 2800 名の日本人を対象に英語冠詞に関する中間言語分析を行ない、言語情報処理理論と認知意味論の観点から、英語冠詞の選択原理を図式化している。
